

一般
投稿論文

情報伝達型の日本語文章に現れるあいまい表現の類型化とその改善例

阿部 圭一^{†1}

^{†1} 愛知工業大学

あいまいな日本語表現について、できるだけ網羅的な考察を行うことが本論文の目的である。会議録、連絡メモ、事務的なメール、仕様書、マニュアル、レポート、論文、その他の「情報伝達型」の文章・文書において、あいまいな日本語表現はできるかぎり避けるべきである。筆者はこれらに共通する情報伝達型の日本語文章作成の指導を長年行ってきた。その結果の一部として、本論文では、日本語においてどのようなあいまい表現がよくあるかを類型化し、具体例と改善例を示す。

1. はじめに

本論文では「情報伝達型」の日本語文章におけるあいまいな表現をできるだけ網羅的に類型化し、その具体例と改善例を示す。

1.1 情報伝達型の文章とは

情報伝達型の文章とは筆者の造語で、文献[1]で用いられたものを転用・拡張した用語である。事実と意見をできるだけ正確に、かつ読み手の労力が少ないように伝えることを主目的とする文章をいう。ここでの「情報」は、事実と意見[2]だけを含み、感情や情緒は含まない。

情報伝達型の文章・文書には、次のものが含まれるが、これらだけではない。

- 論文、レポート
- 報告書、議事録
- 仕様書
- 取扱説明書（マニュアル）
- 通知、広報、事務的なメール
- 法律、規則
- Web ページのテキスト部分

企画書、提案書、詫び状などは、人を動かす力を持っていないければ意味がないという点で、純粋な情報伝達型の文章とはいえない。しかし、それらにおいても、まず事実と意見が正確に伝わるのが人を動かす大前提であると、筆者は考える。

情報伝達型の日本語文章においてあいまいな表現を避けることは、日常的な仕事を円滑に進めるためだけでは

情報技術と書き手、 両面から取り組もう

なく、近年、次の2つの理由でも要請が厳しくなっている。

- (i) ソフトウェアや情報システム、組込みシステムの開発の一部を中国・インド・ベトナムなどへ発注するオフショア開発が拡大している。その結果、これまで日本国内での発注・受注関係ではあいまいにされがちであった明確な仕様書の作成という課題が顕在化した。
- (ii) 日本の製造業が生産や販売で海外に事業展開するには、製品に付随する膨大な文書を英語・中国語などに翻訳する必要がある。この翻訳過程の一部を機械翻訳で行いたいのだが、元となる日本語文章にあいまいさが多いため、まずそれらのあいまいさの除去が必要になるという[3]。

情報伝達型の日本語文章におけるあいまい表現の回避には、2つの方向からの対策がある。

- (1) 情報技術によって支援する。具体的には、でき上がった電子化文書を、ソフトウェアによって検査し、あいまいな表現を指摘し、ときには自動修正し、あるいは言語を制限することによりあいまいさを減らす。
- (2) あいまいさが極力少ない文章を書くように、人を教育し、訓練する。

両者は相まって進められるべきと考える。

(1) の方向からの先駆的な試みは、文献[4],[5]に述べられている。現在は、いくつかの企業が、電子化された文

章を検査し、修正を提案するソフトウェアを開発・提供している。

また、あいまいな表現については、認知科学他からも取り組まれている [6]。菅野は、ファジイ理論を用いて言語のあいまいさを論じている [7]。

1.2 筆者のプラクティス

筆者は、大学を中心として約 40 年、(2) の方向で教育を行ってきた。レポートや論文の執筆だけでなく、他の情報伝達型文章・文書の作成についても広く調査し、それを教育に反映してきた。あいまいな表現の回避もその一部である。

学生への教育の過程は、基本的に図 1 に示すとおりである。あらかじめ日本語文章技術について講義、あるいはそれに関する本を輪読形式で読ませて教員が補足する。その後、授業ならば適当な課題を与えて、学習したことを添削指導を通じて具体例で身に付けさせる。研究室内ならば、添削指導は内部の研究報告・学会発表原稿・卒業／修士／博士論文・学会投稿論文に対して行われる。

このやり方は、ほとんどの大学教員において同じであろう。ただし、筆者は次に述べる 2 つの大きな問題点があると感じている。

[問題点 1] 添削指導は、効果があり、かつそれを通じてしか学生の文章作成能力は伸びないが、効率がきわめて悪い。つまり、教員の負担に対して学生の文章の改善度が小さすぎる。これが約 40 年の経験による結論である。

理由の 1 つは、時間が限られていることである（特に、外部への提出・投稿の場合）。第 2 の理由は、文章を書くことは何層にもわたる複雑な作業であることである。時間に追われることもあって、いくつもの層における注意を一度にしてしまう。学習者側の効果という点でいつも気になっていた。

問題点 1 に対する対策として、近年、図 1 の (1) の一部、あるいは (2) の一部を演習問題による訓練で置き換える方法が提案されている [8]。演習形式ではないが、本論文もその一環である。また、図 1 の (2) 添削指導の一部を、学生間の学び合い・教え合いによって代替することも試みられている [9],[10]。



図 1 文章技術教育の過程

[問題点 2] 大学では通例、文章技術教育がレポートと論文を対象に行われることが多く、他の情報伝達型の文章も含めた教育はあまり行われていない。

大学において情報伝達型の文章技術指導を広めるには、克服しなければならない問題がある。時間的制約と教員の能力である。論文作成指導を熱心に行うことは、教員にプラスのフィードバックをもたらすので、そちらにほとんどの時間を使いがちである。また、教員の大半が、レポート・論文以外の情報伝達型の文章技術を学んだ経験がない。レポート・論文に限定しない文章技術に関する、学生向けの良い図書が少ないことも難点である。

筆者は、これに対し、多種の情報伝達型文章の書き方に関する本や資料を読んで、**情報伝達型文章に共通する書き方のルールや例を集めてきた**。結果は教育にフィードバックするとともに、文献 [11] にまとめた。

本論文は、上記の過程で気がついたり集めたりした、あいまいな日本語表現の類型と例を集大成したものである。より直接的には、筆者が参加しているシステム開発文書品質研究会 (ASDoQ) での議論が契機となっている。

あいまいな表現の発見のコツは、読み手の立場に立って、表現しようとした意図とは別の解釈があり得ないかという目で読み返すことである。しかし、これがなかなかできない。本論文で提示した日本語あいまい表現の網羅的な類型化は、上の目的のための参考に資すると考える。あいまいな日本語表現には、

- (a) その種のあいまい表現があることを知り、意識すれば回避できるもの
- (b) 意識しても気づきにくいもの

がある。本論文ではそれらを区別していないが、(a) のタイプのあいまい表現を避けるには役立つであろう。

1.3 本論文で扱うあいまい表現の範囲

以下では、1.1 節で述べた (2) 教育・訓練の立場から、あいまいな日本語表現についてできるだけ網羅的に考察する。もちろん、記載内容を (1) 情報技術による支援にも役立ててもらって結構である。文章技術に関する書籍や雑誌であいまいな日本語表現が採り上げられることがある（たとえば文献 [12],[13]）。しかし、本論文での網羅性と比較すると、ごく部分的でしかない。

本論文で扱うあいまいな日本語表現は、原則として、**1 つの文内、あるいは文と文との接続関係で生じるもの**のだけとする。これより大きな問題として現れるあいまいさには、次のようなものがある。これらのほとんどは、文章表現というよりも、文章の内容・構成を考える段階

に起因する問題である。

- 述べるべきことが落ちている。たとえば、適用範囲、前提条件が記述されていない。
- 論理があいまいである。
- 複数個所の記述が食い違っている。
- 見出しと内容とが一致していない。
[例] 見出しから想像される内容とは明らかに異なるものが一部混じっている。
- 内容と文章構造・レイアウトが一致していない。
[例1] 箇条書きの中に、他と並列にすべきでない項目が混じっている。
[例2] 箇条書きで挙げた条件のほかに、箇条書き以外の部分に他の条件が記述されている。
- 図表・参考文献と本文での参照が一致していない。
- 言いたいことのポイントがつかめない。
- 事実と意見が区別されていない。
- (論文等において) 自分のやったことと他人のやったことが区別されていない。
- 自分が書いた部分と引用部分とが区別されていない。
- 引用元が明確でない。

これらについては、現れ方があまりにも多様であるので、本論文では扱わない。

また、文法違反や、主語と文末が対応しない、いわゆるねじれ文についても考察外とする。

2. 「あいまいな」の2種類の意味

本論文の主題である「あいまいな日本語表現」は、あいまいな日本語表現である。そのあいまいさは、「あいまいな」という形容動詞から生じる。「あいまいな」とは、どのような意味であろうか？

日本語の「あいまいな」には次の2種類の意味があると、筆者は考える [14]。

- (1) 複数の解釈を生む。
- (2) 表現の目的に対して、意味するものが広すぎる。すなわち、ぼやけた表現になっている。

模式的・感覚的に示すと、図2のようになる。

このほかに、あいまいとは言えないが、次のような場合もある。

- (3) 意味が理解できない。すなわち、一通りの解釈も思い浮かばない。

上記の3種類で「あいまいな日本語表現」のカテゴリを尽くしているのか、また、(1)と(2)の両方に当てはまる例があるのかは、まだ考察が不十分である。

あいまいな日本語 表現には2種類ある

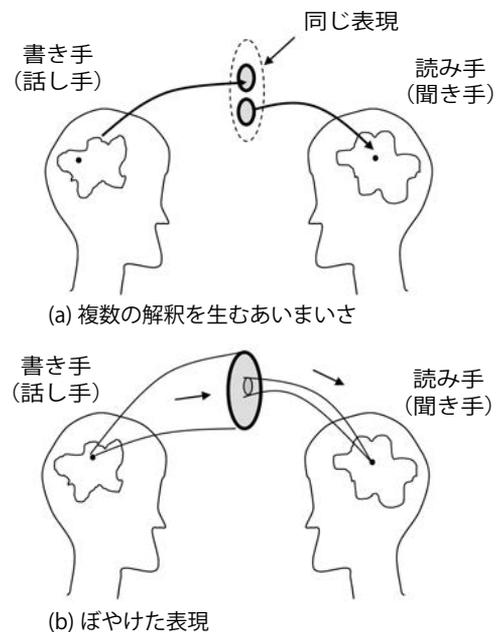


図2 2種類のあいまいさ

以下では、上記の(1)については3.1節と3.2節で、(2)については4章で、(3)については3.3節で、具体例を列挙する。

3. 複数の解釈を生む「あいまいさ」

複数の解釈を生むあいまいな日本語表現について、普通の人は鈍感である。なぜなら、それらの複数解釈は、ほとんどの場合、広義の「文脈」によって1つの解釈に絞られるからである。ここでいう広義の文脈とは、その文章の前後の内容だけでなく、読み手(聞き手)の文化的・社会的背景や事前知識も含まれる。

たとえば、川端康成のノーベル賞受賞講演の題目「美しい日本の私」において、美しいのは私、すなわち川端康成であるとする人はいないであろう^{☆1}。しかし、同じ構文の曲名「美しき水車小屋の娘」では、美しいのは水車小屋でなく娘であろう。

しかし、文脈による解釈の一意化に頼ることは、書き手(話し手)とは異なる「文脈」を有する読み手(聞き手)の場合、誤解を生じる可能性をはらむ。この種のあいまいな表現は、書き手の思い込みにより、複数の解釈が生じる可能性に気づかないで書かれることが多い。

^{☆1} ちなみに、この題目の英訳は Japan, the Beautiful, and Myself であるから、美しいのは日本であることが明確である。

スイッチ・ヒッターになろう！ 場合に応じて、婉曲な表現も 明確な表現もできる人に

以下、3.1 節で文レベルのあいまいな表現を、3.2 節で語レベルのあいまいな表現を採り上げ、3.3 節で意味の通じない表現に触れる。

3.1 文レベルのあいまいな表現

文と文との関係

接続語句が省略されていると、文と文との間の関係があいまいになることがある。

[例] 定期保守を要する部品〇〇を4個から2個に減らした。この変更により平均故障間隔が4,620時間から6,040時間に伸びた。(2つの文の関係が、「そのため」という正接の関係か、「それにもかかわらず」という逆接の関係かがはっきりしない。)

書き手と読み手の文脈の違いによって誤解が生じる

[例1] UFOは存在する。(未確認飛行物体という原義では確かに存在するが、宇宙人の乗ったUFOが存在するという意味にとる人もいるかもしれない。)

[例2] ドラッグ&ドロップ(ドラッグして移動しドロップするという一動作ではなく、ドラッグとドロップという2つの動作と初心者に解釈された。)

主語がないため、複数の主語が考えられる

[例1] この製品はA社の社長自らが開発したものである。従来の品にない高級感を備えていると宣伝している。(宣伝しているのは、A社かA社の社長か?)

受身の文では、動作の主体が省略されることが多い。このため、あいまいさが生じることがある。

[例2] 明日の運営会議は延期された。(誰が延期を決定したのか?)

「私」という主語はしばしば省略される。このためにあいまいさが生じることがある。

[例3] ソフトウェア〇〇の納期の遅れについて、制作委託先のA社B氏を呼んで、発注元のC社D部長とともに説明を受けた。遅れの理由と状況についていろいろと弁解されたが、納得しなかった。25日にC社において再度協議する。(納得しなかったのは、私なのか、D部長なのか、2人ともなのか?)

次の例も、主体が「私」であるかどうかによるあいまいさが生じる例である。

[例4] AさんとBさんは高校時代に同じクラスでした。

(AさんとBさんと私が同じクラスだったのか、AさんとBさんだけなのか? 前者のときには「AさんとBさんは高校時代に私と同じクラスでした」とすればよい。後者のときにはどうするか、読者も考えていただきたい。)

動詞に対して、必須格の記述がない

[例] この現象が発生したとき、対応する信号を送出する。(「対応する」とは、この現象に対応するという意味か? また、送出手はどこか?)

[改善例] この現象が発生したとき、現象発生を知らせる信号を××に送出手。

修飾する先が複数考えられる

これは、日本語では修飾語が常に被修飾語よりも前になければならないという制約によって、頻繁に起こりがちである。

[例1] あいまいな日本語の表現(「あいまいな」に係るのは「日本語」か、「表現」か?)

[改善例] あいまいな日本語において用いられる表現/日本語におけるあいまいな表現

[例2] 木曜日と金曜日の午前は在社しています。(木曜日全日と金曜日午前なのか、木曜日午前と金曜日午前なのか?)

[改善例] 木曜日午前午後と金曜日午前は在社しています。/木曜日金曜日午前中は在社しています。

[例3] 明日までに修正をして課長に提出し、30部印刷すること。(明日までに修正・提出をすればよいのか、印刷までを行う必要があるのか?)

[改善例] 「修正をして課長に提出し、30部印刷すること。」の後に、「提出期限は明日まで。」か「明日までに印刷してほしい。」のどちらかを書く。

修飾語句が、限定する働きなのか、単なる説明か

[例] 顧客との関係がよく分かっていない新入社員にはこの仕事を任せられない。(新入社員の中には顧客との関係がよく分かっていない者もいる。そういう社員にはこの仕事を任せられないという意味か? それとも、すべての新入社員は顧客との関係がよく分かっていない。だから、新入社員にはこの仕事を任せられないという意味か? 後者の場合には、「新入社員にはこの仕事を任せられない。顧客との関係がよく分かっていないから。」とすれば明確になる。前者の場合には、長くなるが、ここでの説明のようにせざるを得ないだろう。)

指示代名詞(こそあど言葉)の指すものは?

[例] 地球温暖化が進んでいる。その主な原因は、人類

の活動によって、二酸化炭素をはじめとする温室化効果ガスの濃度が高まっていることにあるという説が有力である。しかし、これを否定する意見もある。「これ」が、①「地球温暖化が進んでいる」、②「温室化効果ガスの濃度が高まっている」、③「②が①の主な原因である」、④「人類の活動によって」のどれを指すのかが明らかでない。「これ」を具体的な字句で置き換えるべきである。）

列挙された条件は AND か、OR か

条件が複数あるときには、それらのすべてを満たさなければいけない AND 条件なのか、どれか1つ以上を満たせばよい OR 条件なのかを明示すべきである。文脈や各条件の意味によって AND 条件であるか OR 条件であるかが明らかな場合が多いが、明示することを原則とする。

AND 条件のときは「下記のすべての条件を満たす場合」、OR 条件のときは「下記の条件のうち1つ以上を満たす場合」といった記述になる。

断定なのか、推量なのか

断定するときは「である」などの終止形を用い、推量のときは「らしい」「であるようだ」「と推測される」など、推量であることを明示する。「であろう」「と思われる」「と考えられる」は、断定に伴う「当たり」を和らげる婉曲語法として用いられることがあるので、避ける方がよい。

未決・既決・予定の区別

会議録や予定の通知などで生じやすい。

[例] この件は経理部との合同会議にかけています。(今にかけているのか、すでにかけて了承を得ているのか?)

単数か複数か、あるいは含まれる範囲は?

[例1] 返品された不良品を送ります。(個数を明記すればいい。)

[例2] レストランでA社の部長たちに会った。(会ったのは、A社の部長他なのか、A社以外の人もいたのか?)

範囲・類型を表す語+否定

全否定なのか部分否定なのかがあいまいな表現はよく生じる。

[例1a] 祝日はすべて休みではない。

[例1b] どの祝日も休みではない。

全否定ならば、「祝日はいつも営業します」とか、「祝日はすべて出勤日である」という表現にする方がよい。部分否定ならば、「祝日も休みでないことがある」とか、「休みの祝日とそうでない祝日とがある」とか、表現すべきである。

次も、全否定か部分否定かがあいまいな例である。

[例2] 常にそのコーナーを選ぶことはできない。

全否定か部分否定か以外にも、範囲・類型に関してあいまいな否定表現がある。

[例3] 暗くなるまで遊ばない。

例3は日常的な文であるが、これに近い次の文はどうか?

[例4] コンポーネントAは、起動通知を受信するまで動作しない。

[改善例] コンポーネントAは、起動通知を受信するまで動作せず、起動通知によって動作に入る。/コンポーネントAは、起動通知を受信する前に動作を終了する。本論文では、コラムに述べるような日常レベルにおけるあいまい表現は採り上げない。しかし、上の例3と例4の関係のように、情報伝達型の書き言葉の文章においても同様なあいまい表現が生じる可能性のあるものもある。それらについては、できるだけ言及する。

「のように」+否定

[例] この製品は、先行品のように低価格ではない。(先行品は低価格であったのか、なかったのか?)

[改善例] (前者の場合) この製品は、先行品と違って低価格ではない。(後者の場合) 「この製品は、先行品と同様に、低価格ではない」とすればよさそうに見えるが、まだ微妙である。くどい表現だが、「先行品も低価格ではなかったが、この製品も低価格ではない」とすれば、明確である。

比較する対象があいまい

[例] 我が社はA社よりもB社からの受注が多い。(我が社の受注はA社からよりもB社からのほうが多いのか、B社からの受注は我が社のほうがA社よりも多いのか?)

見出しと内容の不一致、あるいは、一般的すぎて伝わる情報が不十分な見出し

後者の例を挙げる。

COLUMN 「日常レベルにおけるあいまい表現」

会話などの日常的な表現においても、あいまいな表現は多い。有名なものを2つ挙げる。

[例1] ないものはない。

[例2] 太郎と花子が結婚した。

山内博之は、日常会話などにおいて複数の意味にとれる文を集めてクイズ形式にしている[15]。例の多くは、複数の意味を持つ語の使用や、「言葉足らず」によるものであるが、参考になる。

[例1] その他（何に対して「その他」と言っているのか？せめて「その他の注意事項」などと書くべきではないか？）

[例2] 全般的事項

[改善例] この仕様書全体に適用される約束事や表記上のルール

駅って何？

3.2 語レベルのあいまいな表現

用語のあいまいさ

これはさらにいくつかに分けられる。

— どの範囲を指すか、何を指すか

[例1] 自動改札機を製造している会社の運賃計算ソフトウェアの仕様書において、「駅」という語がさまざまな意味で使われていた。仕様書の見直しを、「駅」という語の定義を整理することから始める必要があったという。「駅」には、

- (a) 乗り換え路線がない駅
- (b) 同じ鉄道会社の他の路線に、改札口を出ないで乗り換えることのできる駅
- (c) 同じ鉄道会社の他の路線に、改札口を出て乗り換えることのできる駅
- (d) 他の鉄道会社の路線に、改札口を出ないで乗り換えることのできる駅
- (e) 他の鉄道会社の路線に、改札口を出て乗り換えることのできる駅

や、(b)―(e)の複合など、運賃計算上さまざまなタイプの駅がある。仕様書中に「駅」という語が現れるたびに、そこでの「駅」とは、これらのカテゴリの中のどの範囲を指しているのかを規定しなければならなかったそうである。

[例2a] 本日中（勤務時間中、たとえば夕方5時までなのか、23時59分までなのか、明日の朝の出勤前まででもよいのか？）

[例2b] 今週中（金曜日の勤務時間内か、金曜日23時59分までか、土曜日までか、日曜日までか、月曜の朝までか？）

[例3] ドキュメント（紙媒体のみか、電子媒体も含むのか？）

[例4] 初期化する、リセットする、リスタートする（どの状態に戻すのか、どの状態から再開するのがあいまいな場合がある。）

[例5] 同期をとる（時間差はどこまで許されるのか？）

— 広義か狭義か

[例1] 「ホームページ」は、初期には一群のWebページの起点となるページの意味で使われた。しかし、今ではすべてのWebページを指してホームページと呼ぶ使われ方もある。

[例2] 「携帯電話」という語は、スマートフォンを除いて使われる場合もあるし、スマートフォンを含めて使われる場合もある。

— 全体か部分か

[例] あるシステムの初期化処理にモジュールが追加された。それに対して「データ××は初期化処理で値が設定されるか」を尋ねたところ、「設定される」という回答であった。質問は「システムの初期化処理において毎回設定されるか？」という意味であったが、回答は「追加されるモジュールでの初期化処理では設定される」という意味であった。（他のモジュールでの初期化処理については無回答。）

— クラスかインスタンスか

[例1] AさんとBさんは同じ机を使っている。（1つの机を共用しているのか、同じ製品の2つの机か？）

[例2] 「Aは○○である」という表現のAを「クラス(概念)」と捉えて、一般的に上の記述が成り立つと思っていたら、書いた人はその文脈の制限において「Aは○○である」と書いていた。

複数の意味を持つ語

複数の意味を持つ語（多義語）の、特定の個所での意味は文脈によって決まることが多い。しかし、前にも述べたように、文脈に頼りすぎることは危険である。

情報伝達型の文章においては一語一義の原則を守るべきである。一語一義には、2つの側面がある。

- (1) 1つの概念（ものやこと）は1つの語で表す。
- (2) 1つの語を複数の概念を表すのに使わない。

(1)に違反すると、使われた複数の語が1つのものごとを表すのか、異なるものごとを表すのか、読み手（聞き手）はとまどう。多義語は(2)に関係する。

以下では、多義語のなかでよく問題となる語を挙げる。助詞については、次項でまとめて論じる。

[例1] 数（数字、数値、番号、個数など多くの意味を持つ。これらの語に書き分ける方がよい。）

[例2] ある（「或る」という意味の連体詞、「有る、在る」という動詞、「・・・がある」「・・・である」のように補助的に用いられる場合がある。これによってあいまいとなる具体例は、後で「区切り方のあいまいさ」の項で示す。）

[例3] 英語の形容詞・副詞の比較級に相当する表現として「より大きい」などと書くことがある。場合によってあいまいとなる。この具体例も「区切り方のあいまいさ」の項で示す。

[例4] 会（団体を指す場合と会議を指す場合とがある。「〇〇研究会」というとき、団体名なのか、特定の日の会合を指しているのか、あいまいなことがある。）

[例5] 文（「文章」という意味と、文章の構成単位としての、句点で区切られる「文」という意味とがある。「名文」「評論文」「本文」などの合成語は例外として、「文章」と「文」は区別して書くべきである。）

[例6] 人（人を一般的に指す場合と「他人」という意味で使う場合がある。後者であることを明確にしたいときは「他人」と書くときよい。）

助詞の「の」「で」「は」「が」「より」「に」

— 助詞の「の」

以下に示すように、さまざまな言葉の代わりとして、「の」1字で済ませることができる。そのために、「の」が連続して使用されることも多い。

[例1] 東大のシンポジウム（東大で開かれるシンポジウムなのか、東大主催のシンポジウムなのか、東大に関するシンポジウムなのか？）

[例2] 私の大学の構内の桜の並木の満開の頃

[改善例] 私が勤める大学の構内にある桜並木が満開になる頃

例2の改善例にも現れたように、「の」をその場の意味に応じて、もっと限定的な表現に置き換えられるときは置き換える方がよい。「の属する」「にある」「になる」「に関する」「という」「が」（主格の場合）「に対する」「における」「による」「が持つ」「が所有する」など。

いくつもの「の」の連続は避けるべきであると説く文章術の本は多い。具体的な制限としては、2個まであるいは3個までという主張が普通である。

また、「こと」「もの」に相当する言葉を口語では「の」と言うことがあるが、あらたまった文では「こと」「もの」、あるいはもっと具体的な語で書くべきである。

[例3] 彼の書いたのを修正する。

[改善例] 彼が書いた原稿を修正する。

例3の最初の「の」のように、主格を表すには「の」ではなく「が」を用いること。

— 助詞の「で」

助詞の「で」には、①場所、②時間、③手段・方法、④原因・理由、⑤動作の主体、などを表す多様な使い方がある。場所の場合には「において」、手段・方法の場合

には「によって」、原因・理由の場合には「という理由で」などと書き分ける方がよい。

[例] 何で来たの？（移動手段を尋ねているのか、理由を尋ねているのか？）

— 助詞の「は」

助詞の「は」は、主格を表すのではなく主題を表すため、「が」「を」「に」などさまざまな格の代用になる。これによって、次のようなあいまいな文が生じる。

[例] 彼は（彼には）世話をする人がいない。

[改善例] 彼を世話する人がいない／彼が世話しなければならない人はいない

— 接続助詞の「が」

逆接を表す「が」と、特に逆接を意味せずに文をつなぐ「が」の用い方がある。逆接以外の「が」は、文をいたずらに長くするので、用いない方がよい。逆接であるか否かは、「が、しかし」に置き換えて違和感がないかどうかで分かる。

[例] A社の新人事が発表されたが、これでA社の業績も持ち直すだろう。（逆接ではないので、2つの文に分ける方がよい。）

— 助詞の「より」

比較を示す使い方と、起点を示す使い方とがある。起点を示すには「から」を用いる方がよい。

— 助詞の「に」

[例] 出張は4月15日に変更になった。（出張日が4月15日になったのか、出張日は別の日で、4月15日に変更が決まったのか？）

文脈の欠落によってあいまいとなる表現

[例1] 年の記載のない月日表現（年月が経つと、何年のその月日であったかがあいまいになる。）

[例2] 「明日」「先月」というような日付の相対表現（基準となる年月日を探さないと、いつのことなのかははっきりしない。メールでは発信日とそれを読む日は異なるかもしれない。「明日4月17日（火）」のような絶対表記も添えることを勧める。曜日を書くのは、日の思い違いを発見するきっかけとなることがあるためである。）

このほか、ある時点では関連する文章・文書の存在や当事者間の共通理解によって意味が明瞭であるが、時が経つにつれてその文章単独では意味があいまいになる表現があり得る。

範囲の境界

範囲を表現するとき、その両端（境界）のそれぞれが範囲に含まれるのかどうかは明確にすべきである。数値

においては、「以上」「以下」は境界を含む、「を超える」「未満」は境界を含まないことが慣習として確立している。「～から～まで」という表現の場合には要注意である。

[例1] 宿泊を予約するのに「12月3日から5日まで」と書くと、5日の朝発つのか5日の夜も泊まるのかがはっきりしない。「12月3日夜から5日朝まで」などとするか、泊数も明示する方がよい。

[例2] 1月5日までゴミは出せません。(1月5日にゴミを出してもよいのであろうか?)

倍率・比率に関する表現

[例1] 150%の増加(元の値の2.5倍か、1.5倍か? 素直に読めば2.5倍だが.)

[例2a] 3倍増加した(「3倍に増加した」と混同しやすい.)

[例2b] 40%減少した(「40%に減少した」と混同しやすい.)

[例3] 2倍の大きさの正方形(1辺の長さが2倍か、面積が2倍か?)

複合名詞の意味が不明確

前の名詞と後の名詞との関係があいまいな場合がある。特に、3語以上の名詞をつないだ複合名詞では要注意である。

[例1] 国内空港(国内にある空港という意味か、国内線だけの空港という意味か?)

[例2] 特別講義日程(特別講義の日程か、特別な講義日程か?)

区切り方のあいまいさ

[例1] 今日日本人は

[例2] 結論である意見を手っ取り早く書きたいのは当然だが、

[例3] 10年前より広い敷地を求めて隣接する土地を購入した。

[例4] トラックが故障して止まっている車に追突した。

[例5] 彼が犯人だと目星をつけたのは彼女だ。

年月日の表記法

[例] 12/04/01(どれが年、どれが月、どれが日を表すのか分からない。外国では日/月/年、年/日/月など、さまざまな記法を用いる慣習がある。2012年4月1日と書くか、2012 April 01という表記やその逆順表記を勧める。)

基準のあいまいな比較

[例] この論文の評価を1(低)～10(高)で付けてください。(せめて、「8以上は賞への推薦候補、5が採録ぎりぎりの線、4はあと一步」くらいの基準は示してほしい。)

あいまいな記号の使用

[例] 記号としての矢印(→など)は、さまざまな意味に用いることができる。普通の文章では使わない方がよい。メモやプレゼンテーション・スライドのような、並行して説明を加えることができる資料では用いることが許される。

本論文では専門家向けということで使っているが、一般向けの文章では、/を「または」や「および」の意味で使うことは避ける方がよい。

(あいまいではないが) 語の誤用

[例] インターネットする。(Webページをあちこち参照することを、こう表現する人がいる。インターネットとは、Webやメールサービスを実現しているハードウェア/ソフトウェアの技術のことであるから、この使用法は誤りである。誤用によって、意図したものと別の解釈をされるかもしれない。)

3.3 意味が通じない表現

未定義・未説明の語の使用

読み手あるいは聞き手の持つ事前知識の中にないと考えられる用語を、定義も説明もなく使用してはいけない。特に、専門用語、仲間内だけでふだん使っている用語に注意する。略語や語の省略形もその1つである。たとえば、パーソナル・コンピュータ(パソコン)をPC、ホームページをHPと略記するのも、最初に断ってから使うべきであると考えられる。

また、専門用語として使っているのか、日常用語として使っているのかがあいまいな場合もある。

[例] (システム開発の分野において)テストする

4. 表現の意味する範囲が広すぎる「あいまいさ」

この分類に入るあいまいな日本語表現は、(1)定性的な語、(2)ぼかし言葉、(3)目的に対して意味の広すぎる語に大別される。

4.1 定性的な語の使用

以下に例を挙げるような定性的な形容詞、副詞は、数値を使用した定量的な記述に置き換えられるときにはできるだけ置き換えるべきである。定性的な言葉は、読む人あるいは聞く人によってイメージする範囲が異なるためである。

[定性的な形容詞・副詞の例] 少し、たくさん、大量、多数の、多大な、かなり、相当、多少、少々、あまり、はるか

に、きわめて、非常に、大変、重大な、深刻な、大いに、大幅に、すぐに、しばらく、早急に、速やかに、至急、短期間に、長期にわたる、効率的な、効果的な、十分な、いろいろな、さまざまな、なるべく、できるだけ、可能なかぎり、必要に応じて、基本的に、原則的に、おそらく

[例1] このアルゴリズムの採用によって、実行速度が大幅に向上した。

[改善例] このアルゴリズムの採用によって、実行速度が3.7倍に向上した。

[例2] 近いうちに国民に信を問う。

日本人は and so on や etc. を使い過ぎ?

4.2 ぼかし言葉

日本語ではぼかし言葉が発達していると言う。情報伝達型の文章では、以下に例を挙げるぼかし言葉を用いないことを原則とする。ぼかし言葉には、文中のどこにも現れ得る言葉と、文末専用の言葉とがある。

文中に現れるぼかし言葉

[例] 約、くらい、ほど、ばかり、等、など、ような、ように、らしい、同様、ということ、というもの

この中で、「等」「など」について付言する。日本人の書いた、英文の学術雑誌への投稿原稿をレビューすることの多い英語圏の人から「日本人は and so on や etc. を使いすぎる」と指摘された[16]。

問題となるのは、たとえば、

cars, consumer electronics, digital cameras, and so on

という表現である。and so on に当たる機器の範囲を想像できるだろうか? 英語民族にとっては、and so on や etc. を用いることができるのは、その前に並べられた各語を包含する1つ上のカテゴリを容易に想定できるときだけであると言う。そうでない場合には、

cars, consumer electronics, digital cameras, and other microprocessor-controlled devices

のように、著者の考える上位カテゴリを明示すべきであると説く。日本語文章においても参考にすべき意見と考える。

「等」「など」を1つの事物の後に付ける場合も要注意である。その事物に限定してはまずく、類似の事物も含めたいとき、つい「等」「など」を付けたいくなる。しかし、類似の事物とはどの範囲を指すのかは一般に明確でない。

[例] 留学生等はこの対象にならない。

[改善例] 留学生等、日本国籍のない者はこの対象にならない。

文末専用のぼかし言葉

[例] であろう、と思われる、と考えられる、と言えなくもない

4.3 目的に対して意味の広すぎる語

[例1] 昨日お送りした文書(〇〇に関する提案書とか、〇〇報告書とか、第3回〇〇会議議事録とか、できるだけ具体的に記述する方が相手も文書を特定しやすい。)

「情報」「データ」「システム」「資料」「記録」という言葉も意味が広いので、より狭い意味の語を用いることができるときは、そうする方がよい。カタカナ語の中には、まだ意味が定着していなくて、読み手(聞き手)によって理解がずれる語があるので、注意したい。

[例2] コンプライアンス、(日常語として用いた)レビューする、コミュニケーション能力

「もの」や「こと」は最も広い意味の名詞であるから、より具体的な名詞に置き換えられるときは置き換えるほうがよい。同様に、「する」「行う」「見る」という、意味が広い動詞の使用は避ける方がよい。

[例3] メールする

[改善例] メールを送る、メールをチェックする、メールを読み書きする、など。

5. おわりに

あいまいな日本語表現のよくあるパターンを網羅的に具体例つきで論じた。本論文が仕様書、マニュアルをはじめ日々の事務的なメールに至るまで、情報伝達におけるあいまいさを減らし、無用な混乱を招かないことに役立てば幸いである。

情報伝達型の日本語文章一般を書くことに対する訓練は、あいまいな表現を避けることだけではない。その訓

COLUMN 「はっきりした表現は日本語ではない?」

ドナルド・キーンが「五日間病気でした」と書いたら、「五日ほど」と直されたという[17]。確かに病気の始まりと終わりははっきりしたものではなからう。しかし、「風邪で大学を二日休みました」というときも、つい「二日ほど」と言いたくなるのは、筆者が日本人である証拠だろうか?

練のためには、情報伝達型の日本語文章の書き方に関する公的な、あるいは少なくとも半公的なガイドラインの確立が急務であると考えられる。これについては別の機会に論じるつもりである。

謝辞 あいまいな日本語表現に関してできるだけ網羅的に考察しようと思ったのは、システム開発文書品質研究会 (ASDoQ) での議論がきっかけである。同会の会員からは、多くの意見、ヒント、具体例を提供いただいた。その意味で、本論文は筆者の著作であると同時に ASDoQ の成果物でもある。

ASDoQ 会員以外では、幡山五郎氏、石井健一郎氏、棚橋純一氏からのご教示や例示に感謝する。査読者および共同推敲担当者から多くの有益な助言をいただいて修正した結果、本論文の有用性が高まったものと信じる。厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 1) 小松達也: 英語で話すヒント, 通訳者が教える上達法, p.78, 岩波新書 (2012).
- 2) 木下是雄: 理科系の作文技術, 7章, 中公新書 (1981).
- 3) 横井俊夫: 特許文章ライティングマニュアル, 特許ライティングにおける「伝える日本語」と「訳せる日本語」, 第3回産業界日本語研究会・シンポジウム予稿集, pp.23-42 (2012).
- 4) 長尾 真: 機械翻訳文の質の評価と言語の制限, 情報処理, Vol.26, No.10, pp.1197-1202 (Oct. 1985).

- 5) 長尾 真, 田中伸佳, 辻井潤一: 制限文法にもとづく文章作成援助システム, 情報処理学会研究報告自然言語処理, 1984-NL-044 (July 1984).
- 6) 安西祐一郎 他 (編): 認知科学ハンドブック, pp.466-470, 共立出版 (1992).
- 7) 菅野道夫: ファジ理論の展開—科学における主観性の回復, サイエンス社 (1989).
- 8) 塚本真也: 知的な科学・技術文章の徹底演習, コロナ社 (2007).
- 9) 大島弥生 他: ピアで学ぶ大学生の日本語表現, ひつじ書房 (2005).
- 10) 富永敦子, 向後千春: eラーニングとピア・レスポンスとを組み合わせたブレンド型文章表現授業の実施, 大学教育学会第32回大会 (2010).
- 11) 阿部圭一: 明文術 伝わる日本語の書きかた, NTT 出版 (2006).
- 12) 木下是雄: 理科系の作文技術, 8.3, 中公新書 (1981).
- 13) 中山秀夫: こんな日本語書いてはいけない, NIKKEI SYSTEMS, pp.40-45 (July 2011).
- 14) 阿部圭一: 明文術 伝わる日本語の書きかた, 第2章1節, NTT 出版 (2006).
- 15) 山内博之: 日本語力を磨く二義文クイズ 誰よりもキミが好き, アルク (2008).
- 16) Buist, D: 英語論文の書き方チュートリアル, 2009年日本社会情報学会 (JSIS&JASI) 合同研究大会, ワークショップ3における話 (2009).
- 17) 木下是雄: 理科系の作文技術, p.97, 中公新書 (1981).

阿部 圭一 (正会員) k-abe@aitech.ac.jp

1968年名古屋大学大学院工学研究科博士課程満了。工学博士。静岡大学工学部、情報学部を経て、2006年から2013年3月まで愛知工業大学教授、客員教授。

投稿受付: 2012年12月6日

採録決定: 2013年8月5日

編集担当: 住田一男 ((株) 東芝 研究開発センター)